様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３８００１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６８０７

研究課題名（和文）南琉球・多良間水納島方言の動詞と形容詞の記述的研究

研究課題名（英文）A Descriptive Study of Minna-Ryukyuan, on Verbs and Adjectives

研究代表者
小嶋　賀代子（下地賀代子）（KOJIMA, Kayoko）

沖縄国際大学・総合文化学部・准教授

研究者番号：４０５８６５１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　水納島方言は、石垣島と宮古島の中間に位置する水納島で話されている言語である。先行研究が少なく、多良間島方言との音韻論的差異が知られるのみであったが、研究代表者は「消滅の危機に瀕した南琉球・多良間水納島方言の記述的研究」（科研費23720240）において、水納島方言の格体系、音韻形態論的な特徴、動詞の活用、親族語彙の体系を記述し、多良間島方言との違いを明らかにした。
　本研究では形容詞の形態論的な記述研究を中心に行い、水納島方言の形容詞の基本構造、活用タイプ、また、叙述法断定の３種の形式が焦点化の位置、意味タイプによって使いわけられる場合のあることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　Minna is a highly endangered language spoken in Minna island, which is located between Ishigaki and Miyako islands in Okinawa prefecture. There are very few studies on Minna and they only highlight some phonological differences between Minna and Tarama. The author's previous project "A Descriptive Study of Minna-Ryukyuan, an Endangered Dialect of Southern-Ryukyuan Languages (KAKEN.23720240)" described Minna's Case marking system, some morphophonological features, the verb conjugation system and the kinship terms of Minna, and revealed differences from Tarama.
　The current project aimed to describe Minna's grammatical system of adjectives. The results include the basic structure and the conjugation classes, and systematic description of the differences in the usage of three forms,i-conclusive form (e.g. takasja:i), du merged-conclusive form (e.g. takasjada:i), and root＋munu (e.g. taka=munu).

研究分野：琉球語

キーワード：南琉球　文法記述　水納島方言　多良間方言

１．研究開始当初の背景

(1)奄美大島から与那国島に至る島々の連なりは一般に「琉球弧」と呼ばれている。そして、この琉球弧で用いられている言語は「琉球語」あるいは「琉球方言」と総称されている。琉球弧は、沖縄本島・久米島と宮古島との間に横たわる約 200km の海域を境に「北琉球」と「南琉球」とに二分されるが、このうち南琉球には「宮古」、「八重山」の 2 地域が属する。南琉球の諸方言は首里方言を代表とする北琉球とは大きく異なる言語体系を持っており、その内部差も決して小さくないことが分かっている。北琉球に比べ先行研究の数が少なく、特に文法現象についての研究に乏しかったが、近年は記述研究が盛んに行われている。

(2) 本研究が対象としている「水納島方言」は「多良間」の下位方言の１つである。「多良間」は南琉球の１地域であり、宮古島と石垣島の中間に位置する多良間島と、その北方約 12km の水納島とからなる。その言語の総称を「多良間方言」と言う。研究代表者は多良間島方言の文法の記述研究を通して、これまで単に形態面からのみ言われてきた「宮古」的特徴と「八重山」的特徴を合わせもつという同方言の言語的特徴が、内容面においても際立っていることを明らかにした。

(3) 水納島方言についてはその先行研究のほとんどが多良間島方言との音韻論的差異を指摘するのみで、語彙や文法については「多良間方言と文法，語彙は殆んど変わらない」という記述があるだけであった(崎山理 1962「宮古方言について」『琉球新報』（11/16、11/17 朝刊)）。だが両方言の音韻論的差異は動詞や形容詞の形式の違いに繋がるものであり、活用体系やその他の文法的な形式への影響が十分に考えられる。以上をふまえ、研究代表者は「消滅の危機に瀕した南琉球・多良間水納島方言の記述的研究」（科研費 23720240）において、水納島方言の格体系、音韻形態論的な特徴、動詞の活用（文末終止の形式)、親族語彙の体系を明らかにした。

２．研究の目的

(1)文法（形態論・統語論）に関する記述考察を行う。動詞、形容詞の各活用形式の文法的な意味と用法を記述し、それぞれの体系を明らかにする。動詞についてはムード、テンス・アスペクトといった形態論的カテゴリーの記述、形容詞は活用形式の記述が中心となる。さらに、単文・複文のタイプ、とりたて助辞などによる焦点化、ヴォイス、モダリティなどの統語論に関わる文法事象についても網羅的な記述を試みる。

(2)談話テキストの作成

語りや会話など、水納島方言の談話資料（音声資料）をできるだけ多く文字化する。そして、語構成や意味、文法上の意味役割など言語学的な分析を行い、日本語訳、注釈、Gloss が付されたテキストを作成する。

３．研究の方法

(1)沖縄本島及び宮古島の高野集落で水納島方言の臨地調査を実施した。なお、研究開始当初は水納島での調査も念頭においていたが、言語コンサルタントとして適当な方がいなかったため、高野集落在住の水納島出身の方複数名を主な言語コンサルタントとした。その妥当性について、多良間島方言研究の経験から、島を離れたのが成人後であり、さらに移住後も家庭や地域コミュニティでの方言使用の度合いが高い（高かった）場合、その方言を失うことなく、現在も日常会話として自由に話せる人が少なくないことが分かっている。上記コンサルタントの方々はいずれも、この条件に十分当てはまる水納島方言話者である。

(2)調査内容・項目により、自然談話を録音する方法（自然傍受法）と調査票を用い日本語現代共通語の例文を翻訳してもらう方法（質問法）とを併用した。前者についてはテキスト化を前提として行った。また、調査にはデジタル録音機器とビデオカメラを併用し、音声と画像のいずれの言語資料も採集した。調査場所は主に話者の方の自宅であったため、その生活に配慮しつつ行った。なお臨地調査は初年度に集中させ、調査後は速やかに得られた言語資料を文字化・分析を進めた。

(3)本研究では、臨地調査に加えて 1981 年に多良間村役場から発行された『多良間村の民話』（以下『民話』）とその元となった音声資料（以下「民話 tape」）も研究資料として用いた。本資料は明治から昭和初期の出生者を言語コンサルタントとし、1977 年から 1978 年にかけ「沖縄国際大学口承文芸研究会」を中心とする組織的な調査において聴取された民話を集めたものである。このうち「民話 tape」には、3 人の水納島方言話者による 15 話の民話が含まれている。『民話』は下段に方言の仮名表記、上段に共通語訳を配するという構成で、校正及び注釈はいずれも地元出身者の手になる。仮名表記と「民話 tape」の内容が大きく異なっている箇所については、その音価の推定が可能なものに限って本研究における言語資料の１つとして用いた。

(4)上記の調査資料、言語資料をもとに、研究の目的で示した各項目について記述・考察を進めていった。研究成果のまとめは特に最終年度に集中して行った。

４．研究成果

(1)本研究では、特に形容詞の形態論的な記述研究に焦点をおいた。水納島方言の形容詞は、「語根＋sja／sa＋ai」の基本構造を持ち、「サアリ型」の活用タイプを示している。また、形式のタイプには以下の３種がある。

①語根＋sja＋ai
　ex.「高い」takasjaːi（taka＋sja＋ai）

②語根＋sa＋ai
　ex.「安い」jaqsaːi（jasɯ＋sa＋ai）

③順行同化型
　ex.「冷たい」piguqraːi（piguru＋sja＋ai）／？
　　「軽い」kaqraːi（*kari＋sja＋ai）／
　　kaisjaːi（kai＋sja＋ai）
　　「熱い」aqcjaːi（atsɯ＋sja＋ai）／？
　　「薄い」piqcjaːi（pisji＋sja＋ai）／
　　pisjisjaːi（pisji＋sja＋ai）

①と②の/-sja-/と/-sa-/の別はあくまで音声的なものであり、古代日本語に見られるような、いわゆるク活用、シク活用の区別を表すものではない。③順行同化型について、基本形に２タイプ現れるものがある。これらのうち、□で囲った後者の形式は融合現象が生じていない形式のように見え、kaqraːi＞kaisjaːi（「軽い」）あるいはその逆の変化の過程にある、もしくは全く別のルートで新しい形式が生じたことが考えられる。特に「軽い」に関しては、形容詞の「語根用法」において現れる形式が/kai-/であることから、非融合形式の方が新しい可能性が高い(ex.ureːkai-munu=gama.これは軽いよ（直訳は「それは軽物」。=gama は指小辞))。この場合、その変化は、/imisjaːi/(小さい)など、基本形と語根用法の形式が全く一緒である語からの類推変化であることが考えられる。

(2)水納島方言形容詞の叙述法断定・非過去には以下の３つの形式がみとめられる。

・takasja:i（終止 i 形）
・takasjada:i（終止 du 融合形）
・taka=munu（語根+munu）

本研究では、これらの形式が、焦点化の位置、形容詞の意味タイプによって、以下のように使い分けられる場合があることを明らかにした。

①焦点化の位置：「特性規定」（荒 1989、樋口 1996）の形容詞述語文（[NP-ja　AP] 型など）ではいずれの形式も用いられる。ただ、終止 i 形の出現率は低めであった。焦点は述語部分あるいは文全体にある。

・pukugi=nu nai=ja {kiːru=munu/kiːrusja-daːi/kiːrusjaː-i}.福木の実は黄色い。
・kinuː=jui=sjaː kjuː=ja {piːsja-daːi/pisji=munu/piːsjaː-i}. 昨日より今日は寒い。

ただし焦点化助辞が先に現れている場合、終止 du 融合形は用いられない。この場合は述語部分以外に焦点がある。

・pitoː gaqfiːsja-daːi=sjaga=du,dzjiN=na {ikirasjaː-i/ikira=munu}.（沖縄の結婚式は）人は多いけど、お金は少ない。

②形容詞の意味タイプ：感情などヒトの内的状態をあらわす形容詞述語文（[NP-ja (X) AP] 型など）では、その内的状態をひきおこす対象・要因(X)が発話者自身に関わることであるか否かによって、述語の形式が変わる。なお、発話者自身である場合、終止 i 形、終止 du 融合形が用いられやすいようである。

・toː=mai asɯb-iː qfi-N-niː sabiqsja-daːi.誰も遊んでくれないから寂しい。

また、客観的なコトガラや説明的な発話の場合には語根(+sɯ)＋munu が用いられる。

・vaː upugi-na nar-iqti=mai katadzɯkiː kutu qsa-dakaraː padzɯka-sɯ=munu ar-aN=naː. お前はそんなに大きくなっても片づけることを知らなかったら恥ずかしいんじゃない。

外的な要因によってひきおこされる感情を表す形容詞文の場合、語根＋munu を用いるほうがその感情の度合いが強調されるようである。感覚を表す場合も、語根＋munu が多く用いられる。

・uja=ga sjin-tariː Ndaraː-sɯ=munu.（あの子は）親が死んで可哀想だ。
・jarabi=nu juroː-tikara Ngama-sɯ=munu . こどもが集まったらやかましい。

(3)以上のことなどから、水納島方言形容詞述語文について、「特性規定」の場合「焦点化」の位置によって終止 i 形と終止 du 融合形は使い分けられていること、また「語幹+munu」の形式では、焦点化助辞=du が先行して現れているか否かに関わらず用いられることが明らかになった。

(4)また、これまでの調査・研究の過程において、水納島方言の語彙約 1000 語を収集できている。その１つ１つに、仮名および IPA 表記、語義解説（現代日本語共通語訳)、(採取できたものに限るが）例文を付し、水納島方言の基礎語彙の一覧の作成を進めている。文法調査によって得られた例文も含めており、水納島方言の用例集という側面ももつ。

(5)その他、臨地調査で得られた自然会話および「民話 tape」(「3.研究方法」の(3)参照)から、水納島方言の談話テキストを作成している。言語学的な分析を行い、現代日本語共通語訳、注釈、Gloss を付す作業を随時行っている。

(6)残念ながら年度内には間に合わなかったが、研究年度終了後も研究成果の論文化の作業をすすめている。特に、上記(1)～(3)の内容に関してはすでに論文の形でまとめており、投稿済みである（「5. 主な発表論文等」の[雑誌論文]の①)。(4)(5)に関しても、水納島方言の言語資料として投稿予定である。

(参考文献)
荒 正子 1989「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会（編）『ことばの科学』3、むぎ書房
樋口文彦 1996「形容詞の分類」言語学研究会編『ことばの科学』7、むぎ書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①下地賀代子、南琉球・多良間水納島方言形容詞の叙述法断定の形式、沖縄国際大学日本語日本文学研究、査読無し、第 22 巻 1 号、2017 年 9 月刊行予定

②下地賀代子、宮古語多良間島方言の形容詞形態論、琉球諸語 記述文法、査読無し、Ⅲ、2016、pp.127-147

③下地賀代子、南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の類型(1)―ヒト=イキモノの移動の表現―、琉球大学 言語文化論集、査読無し、13 号、2016、pp.45-65

〔学会発表〕（計３件）

①下地賀代子、多良間方言の「基礎語彙辞典」作成の試み―実践報告―、第 11 回琉球諸語研究、2016 年 12 月 18 日、品川区民第一集会所・第二集会室（東京都・品川区）

②下地賀代子、多良間方言（多良間島・水納島）方言形容詞の叙述法断定の形式、第 39 回沖縄言語研究センター総会・研究発表会、2016 年 7 月 2 日、琉球大学法文学部（沖縄県・西原町）

③下地賀代子、多良間・水納島方言形容詞の叙述法断定の形式（中間報告）、第９回琉球諸語研究会ワークショップ、2016 年 3 月 18 日、琉球大学 50 周年会館（沖縄県・西原町）

〔図書〕（計２件）

①下地賀代子(編著)、多良間村教育委員会、つかえる たらまふつ辞典―多良間方言基礎語彙―、2017、435

②小川晋史(編)、新永悠人、又吉里美、當山奈那、トマ・ペラール、林由華、下地理則、下地賀代子、中川奈津子、クリストファー・デイビス、麻生玲子、山田真寛、くろしお出版、琉球のことばの書き方（第 2 部 8 章「多良間島方言」担当)、2015 、315（pp.215-236）

６．研究組織

(1)研究代表者
小嶋　賀代子（下地賀代子）
（KOJIMA,Kayoko）
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：４０５８６５１７